追悼　渡辺京二

梶原　宣俊

熊本在住の評論家渡辺京二氏が、二〇二二年十二月二十五日、九十二歳で亡くなられた。

私は新聞とテレビを見て知り驚いた。

実は、私が熊本の学生時代に大変お世話になった方である。

私は、渡辺さんの私塾のアルバイト講師として二年ほど大変お世話になった。渡辺さんは、貧乏学生のために時々、焼きそばを作って食べさせてくれた。

渡辺さんは多忙でゆっくり話せる時間がなく残念であった。それでも、水俣病の集会、デモ等には声をかけてくれて参加したことがある。

石牟礼道子さんにもお会いしたことがあるけど、私は恐れ多くて近づけなかった。不思議なオーラが漂う人だった。

渡辺さんとは熊本市内のデモにも参加したことがあるが、渡辺さんが、本気で警察に文句を言っている姿を目前で見て、私はすごい人だなと思った。

その後、私は大学紛争の時に休学して東京に出た。渡辺さんから吉本隆明の話を聞き、本もかなり読んでいたので、私は吉本隆明さん宅に電話をして、学生時代に書いた一四〇枚の「太宰治論」をもって訪問した。吉本さんは気軽に応対してくれて、「渡辺京二さんは元気ですか」と問われ「お元気です」と答えた。吉本さんは「あの方はとても頭がいい方ですよ」と言われた。

私はまだ渡辺さんの本は読んでいなかっ

た。二〇一〇年、ちょうど東京で働いているときに、「黒船前夜」が第三七回大佛次郎賞を受賞され、私は友人ともに参加したことがある。久しぶりの再会であった。

私が渡辺さんの本を読み始めたのは、退職後出水に住みついてからである。「北一輝」や「逝きし世の面影」「なぜ今人類史か」等を読んだが、どれもレベルが高く私には難解であった。一番印象的だったのは、「逝きし世の面影」であった。

江戸末期の日本人、とりわけ庶民が外国人の目によって生き生きと描かれている。当時の庶民が貧しくとも気高く生きている姿が生き生きと描かれている。

一度ご挨拶に行こうと思いながら、ついに行けなかったのが残念である。

あの情熱と鋭い知性が失われ、心からご冥福をお祈りしたい。

春不知火　逝きし面影　京二逝く

（出水喜多会主宰）